

## 〈論説〉

## 蘇維熊と自然主義

——日本統治期台湾文学におけるナショナリズムの契機——

嶋田 聡

## はじめに

台湾では1930年から日中戦争が勃発する1937年にかけては、新文学運動の一つの隆盛期であったといえる。この時代には、まず「郷土文学論争」と一般にいわれる、おもに文学の表記言語に中国白話文と台湾話文のどちらを用いるかという論争が行われ、その動きのなかでいくつかの新しい文学団体が成立し、次々と文芸雑誌が創刊された。これを台湾人<sup>(1)</sup>のナショナリズムの観点からいうと、それ以前の1920年代においては、反植民運動としての新文学運動は中国白話文普及運動に見られるような、同時代中国との連携を模索する「中華」ナショナリズムを主体とするものだったのだが、この1930年代になると、それまでのものとは異なる、新たな「台湾」大のナショナリズムが徐々に形成され始めたということになる。

そして1933年、当時東京にいた台湾人留学生らが中心となって台湾芸術研究会が成立し、『フォルモサ』という文芸誌が創刊された。これはたった3巻出ただけで廃刊になった短命な雑誌であるが、この文芸誌が画期的だったのは、やはり第一に、一部の詩などをのぞくとほぼ全編日本語が使用されているという点にある。これはつまり、台湾の文化が日本による植民統治のもとで日本化されたことの一つの表れであるといえる。ただ、先にも述べた通り、それと同時に「台湾」大のナショナリズムも形成されてくるのであり、その発生のメカニズムについては時代状況との関わりのなかで詳しく分析していかなければならない。

---

(1) ここでいう「台湾人」とは、当時台湾に住んでいた漢族系および原住民系の人々すべてを指し、統治勢力である在台日本人と明確に区別するために、この名称を用いるものとする。以下同様。

本稿では、この「日本化」と「台湾」ナショナリズムの形成との関係に着目し、そのなかで『フォルモサ』がはたした役割について考えていく。とくに、この当時台湾芸術研究会の責任者であった蘇維熊（1908-1968）の文芸思想については、『フォルモサ』の理論的中心を担うものとして詳細に検討していく必要がある。

本稿ではまず、蘇維熊の東京帝国大学英文学科に提出した卒業論文、『*Nature in Thomas Hardy*（トーマス・ハアディに於ける自然）」の内容に注目し、そこに蘇が提唱する「自然文学」の一つの理想を見出す。そして、この「自然文学」がどのように蘇自身の台湾想像へとつながっているのかを検証し、そこから『フォルモサ』発刊のモチーフを考えていく。また、当時の台湾において徐々に強まりつつあった「皇民化」という同化圧力のもと、『フォルモサ』同人らの「台湾」ナショナリズムが形成される際に、この「自然文学」による台湾想像がどのような役割をはたしたのかということも、合わせて検討してみたい。

## I 蘇維熊における「自然主義」

### 1 本人略歴

蘇維熊は1908年、台湾の新竹に生まれた。蘇家は地元ではよく知られた名家で、渡台以前の原籍は中国福建省の「泉州府同安県田頭紅塘郷」であり、維熊は渡台6代目になる<sup>(2)</sup>。1924年に台北第一中学に入ると、1928年には台北高等学校に入学、その後1931年に東京帝国大学の試験に合格し、英文学を専攻することになる。こうした学歴は、当時の台湾人青年にとって、考えられ得る最高のコースをたどったといえる。

留学のために日本へとわたった蘇維熊は、そこで台湾人としてのナショナリズムに目覚め、もともとは日本プロレタリア文化聯盟（コップ）の下部組織であった台湾文化サークルが改組して台湾芸術研究会が発足するにあたり、同会に入会して責任者に任命された。東京帝大英文科では日本英文学研究の「神」とされる斎藤勇教授の指導のもと、卒業論文は「*Nature*

---

(2) 蘇世昌・蘇明陽（2010）を参照。以下も一部を除き同文を参照。

in Thomas Hardy (トーマス・ハアディに於ける自然)」を執筆して提出し、在籍順位332位で同大学を卒業した<sup>(3)</sup>。東京帝大在学中から「自然文学」や台湾歌謡をテーマにした評論や詩を『フォルモサ』や『台湾文芸』に発表している。

大学卒業後は、中等学校英語科教員の資格を取得していたにも関わらず、日本当局から民族主義者として目をつけられていたため教職に就くことができず、1937年から1946年まで張東隆商事株式会社という民間会社に勤務した。戦後になってようやく自らの願いが叶い、台北帝国大学の後身である台湾大学の文学院外文系の教授となった。その後、1952年にはアメリカのミネソタ大学に赴き、自身の研究をさらに発展させた。台湾大学ではイギリスの詩全般とシェイクスピアを専門に教えており、詩に関してはとくに韻律の研究が主であった。また、台湾現代詩を代表する詩誌『笠』の同人としても知られている。1968年3月に病没。享年60歳。

## 2 トマス・ハーディと「自然文学」

では、ここからは蘇維熊の1930年代の文芸思想について見ていく。

『フォルモサ』第2号に発表された「自然文学の将来」と題する評論には、文芸における「自然」について、蘇維熊自身の解釈が提示されている。まず「序論」において、広義の「自然」とは「宇宙間の事象すべて」を指すのだが、この場合人類はあくまで「自然の一部」であるとする<sup>(4)</sup>。ただ、一般的には「若しも人類の出現が無かつたならば、存在しなかつたであらう」ところの「人工的な物」は、「自然」からは除外されるという。そして、アメリカの思想家エマーソン (Ralph Waldo Emerson) の言葉を参照するかたちで、「——「自然」とは普通の意味に於ては、人間によつて変化させられる事のない本質を謂ふ。空気、空間、河川、木葉が其である。「人工」とは以上の事物に人の意思が混在したものに用うる語である」と規定している。さらには、「文芸上に現はれた自然」について、「狭義の其」と「広義の其」に分け、次のように説明する。

(3) 蘇明陽・李文卿編 (2010)、317頁を参照。

(4) 蘇維熊 (1933c)、20頁。

狭義の自然とは、人間以外の外界事物一切を意味し、人間が中心となつて之を鑑賞し解釈する時の自然の相である。広義の自然とは、人間と自然との区別を絶し、人間が自然に没入して渾然として融合するものを指す。自然と人間の魂とが溶け合つて、物心一如の心境を呈するのが、実に東洋人の自然鑑賞の態度である。即ち、広義の自然に当る。其の反対に、西洋では第十九世紀までは彼等は我々の様に自然に接近する事が出来なかつた。自然と人間とは、あまりにも相異なる事の大なる二つの物であつた。此の狭義の自然の域を脱して、自然の奥の魂に触れ得たのは、ウィリアム・ウアヅワアス以後の事である。<sup>(5)</sup>

以上のことから、蘇維熊の提唱する「自然文学」とはおよそどのようなものかが見えてくる。従来の「自然主義文学」というのは一般的に、19世紀後半のフランスでゾラ (Emile Zola) が主唱したような、「現実の真相を科学的にありの儘に描き出さうとする主義、換言すれば『現実』即『真』即『自然』といふ事を基とした文学」<sup>(6)</sup>のことを指す。つまり、人間や人間社会に起こる事象をすべて科学的な自然観察の目で描こうとする文学である。こうしたある意味極端な唯物観が土台となっている「自然主義文学」ではなく、ここで蘇の主張する「自然文学」とは、作者が主体的に「自然に接近」し、「自然と人間の魂とが溶け合つて」、「自然の奥の魂に触れる」ことを目的とする文学のことである。つまり、人間がどのように自らを取り巻く自然を愛好し、またそれとの調和をはかつていくかということが中心的な問題となっている。したがって、自然を志向するということでは「自然主義」と呼べないこともないが、その意味内容は大きく異なってくる。いうなれば、「自然主義文学」というのは「自然文学」のなかの極端な一例に過ぎないということになろう。少なくとも、蘇維熊における「自然主義」とは、この広義の「自然主義」としての「自然文学」のことを指すものとする。

この「自然文学」というカテゴリー自体は蘇維熊のオリジナルではなく、

---

(5) 以上、蘇維熊 (1933b)、21頁。なお、引用にあたっては、漢字の旧字体は新字体にあらため、旧かな遣いは原文のまま表示するものとする。以下同様。

(6) 厨川白村 (1929a)、226頁。

少し前から日本の文芸批評の世界には存在していたものであり、蘇は自らの文学研究の方法としてそれを応用したのである。たとえば、フランス文学者の吉江喬松（孤雁）は自著『自然文学講話』（1925）のなかで、ルソー（Jean-Jacques Rousseau）を「近代自然文学の父」、「近代自然詩人の開祖」と位置づけ、次のように述べている。

彼は山高き水清きスキスのジェネバ湖畔に生れ、少年時をその近くに過ごし、やがて幾多の苦しき経験を得てから放浪の旅に出掛けたのであつた。放浪の旅とは何ぞや。これは自然が誘ふ力強き誘引である。人間が忘れてゐ、また眠らせてゐる自然力の目覚めである。人間はこの自然との接触のために、力強き生命力の自覚を得て来るのである。人間の生活の或時にあつて必ず一度はこの自然の誘引を身に感ずるものである。放浪の旅の要求が身に起つて来るものである。（中略）この放浪の旅がルウソオその人の心の眼を開かせるに非常に力強いものであつた。<sup>(7)</sup>

このように、文学者その人の生い立ちに自然環境からの影響を見、その後の人生においても自然との交渉のなかで自我の発展を考えるというのは、「自然文学」研究における一つの確立された方法になっているといえる。ゆえに、蘇維熊が東京帝大に提出した卒業論文、「*Nature in Thomas Hardy*（トーマス・ハアディに於ける自然）」の第一章「ウェセックスとハーディ」（*Wessex and Hardy*）も、次のように始まっている。

ハーディの先祖たちはウェセックスかその付近に何世紀にもわたって暮らしてきており、彼らの長年にわたるその自然や人々との結合が、ハーディに一人の偉大な自然派詩人になるための十分な遺伝的準備を与えた。彼の父方の血統による音楽的なセンスと自然愛はハーディに豊富に受け継がれ、後に多くの愛と美によって彼の作品の中に表されること

---

(7) 吉江孤雁（1925）、39-40頁。

になるのである。<sup>(8)</sup>

蘇はこのように、トマス・ハーディという一人の「自然派詩人」(nature-poet)の誕生を、「遺伝」を含む周囲の自然環境との密接なつながりのなかに見出そうとしている。さらに蘇は一步踏み込んで、ハーディの自然愛を、ハーディ自身の故郷に対する愛着と並べて論じている。

彼(＝ハーディ；引用者)は自然と、ウェセックスの人々の単純で素朴な生活を愛し、それらを同情をもって注意深く研究し、最後に彼自身の観察や瞑想を誠実に表したのだ。それゆえ、読者は彼の書く作品を信頼することができるのである。<sup>(9)</sup>

こうした「愛」や「同情」、それに読者の作者に対する「信頼」というものが、その土地の「自然」と結びついたとき、そこに容易に近代文学におけるナショナリズムの萌芽を見てとることができる。なぜなら、「自然」なものにはいつもなにか選択を許さないものがある」からであり、「そうしたきずなのまわりには、それが選択されたものではないというまさにその故に、無私無欲の後光がさしている」のである<sup>(10)</sup>。つまり、ここで蘇維熊が見出そうとしているハーディ像とは、そうした熱烈な郷土愛をもった一人の現代的な「国民」詩人の姿だということができる。

この論文の全体を通して蘇は、当時のイギリスを代表するもう一人の自然派詩人・ワーズワース(William Wordsworth)を、比較対象としてもち出している。こうした比較は、単に二人を同列に置いてその詩的特徴を比べるだけではなく、二人の活躍した時代の差異を論じることにもつながっ

---

(8) 蘇維熊(1934)、294-295頁。訳文はすべて拙訳。以下同様。原文は以下の通り。「Hardy's forefathers had lived in or near Wessex for centuries, and their age-long associations with nature and folk there had given him full hereditary preparations to be a great nature-poet. The musical taste and love of nature on his paternal lineage had been inherited to Hardy abundantly to be represented later in his works with much love and beauty.」

(9) 蘇維熊(1934)、295頁。原文は以下の通り。「He loved the nature and the simple, unsophisticated life of the habitants in Wessex; studied them with sympathetic carefulness; and lastly represented his observations and meditations with sincerity. So readers can rely upon his writings.」

(10) ベネディクト・アンダーソン(1997)、236頁。

てくる。なぜなら、ハーディ（1840–1928）はワーズワース（1770–1850）よりも半世紀以上も遅い時代の詩人だからである。

たとえば、蘇はワーズワースの詩について、「自然の甘やかな調べとの結合に富んでおり、彼（＝ワーズワース；引用者）はそれらの調べには調和があると信じていたのである」<sup>(11)</sup>と述べ、さらに次のように指摘する。

ワーズワースは自然の甘い調べのなかに神の手引きを聞いたのに対して、ハーディは野性的な自然の叫びや唸りのほうにより引きつけられた。鳥たちはハーディに向かって、喜びよりもむしろこの世に生きることの悲しい不平不満を歌いかけたのである。<sup>(12)</sup>

蘇によると、ハーディの詩に描出されるこのような自然の「陰鬱な、あるいは荒涼とした顔つき」（gloomy or wild aspects）は、多くがハーディ自身の苦悩に起因するものであるという。たとえば、ハーディの第一詩集である『ウェセックス詩集』（*Wessex Poems*）に関して、蘇は次のように述べる。

25、6歳のハーディは極度の疑念と絶望のなかにあり、人生についての自身の執拗な問いかけに答えることができずにいた。そして、矛盾する理性と感情のはざままでひどく苦しんでいたのである。『ウェセックス詩集』には、その心の状態がもっとも忠実に表されているのだ。<sup>(13)</sup>

ハーディが抱いていたというこうした「疑念」や「絶望」については、当時のイギリス知識人の間ではある程度共通するものであったらしい。伊

---

(11) 蘇維熊（1934）、296頁。原文は「rich in the associations of sweet sounds of nature; and he believed that there were harmonies between them」。

(12) 蘇維熊（1934）、296頁。原文は以下の通り。「While Wordsworth heard the teaching of God in sweet voice of nature, Hardy was rather attracted by the shouts and roars of wild nature. Birds sang to Hardy more plaintive complaints of life rather than gladness.」

(13) 蘇維熊（1934）、310頁。原文は以下の通り。「Hardy of twenty five or six years of age was in his extreme doubts and despairs, being unable to answer to his own obstinate questions of life; and suffered miserably between the contradiction of Reason and Emotion. “Wessex Poems” shows most faithfully that state of mind.」

藤桂子はそのあたりの歴史背景を、次のように述べている。

産業革命が物質的繁栄をもたらす一方で、ダーウィンやライエルなどが提唱した自然科学の新しい理論は、ヴィクトリア朝人に、伝統的なキリスト教的世界観に疑問を抱かせ彼らの価値観を大きく揺がせるほど深甚な影響を与えた。(中略) 彼らが経験した精神的苦闘は、特に知識階級にあつては想像を絶するものがあつた。<sup>(14)</sup>

さらに伊藤は、ハーディの小説『帰郷』(*The Return of the Native*)における、「エグドン・ヒース」(Egdon Heath) と呼ばれる果てしない荒野で知られるエグドンの暗く寂しい風景について、「まさに時代の知的風景そのものである」<sup>(15)</sup>と評している。

こうした近代という「時代」が強いる「精神的苦闘」というのは、当時のイギリスだけでなく、社会の近代化を経験した世界の多くの地域において、「現代人の苦悩」として一般化できるものである<sup>(16)</sup>。蘇維熊はこの点に関して、先にも引用した「自然文学の将来」のなかで次のように述べている。

現代人は最早古人の様には神の存在を認めないのである。かゝる苦難にある人間に取つては、人事に一向に関与してくれないと云ふ冷酷無感覚な宇宙意志の思想が、より尤もらしく受け容れられるではなからうか？ ハーディは即ち主として現代青年の此の思想を捕握して、之を系統化したのである。<sup>(17)</sup>

つまり、ハーディが抱いたこうした自然観こそが、「現代青年」にとっては親しみ深いものであり、そこにハーディ文学の「誠実さ」や「真実味」

---

(14) 伊藤桂子 (2015)、61 頁。

(15) 伊藤桂子 (2015)、62 頁。

(16) たとえば、蘇維熊が「自然文学の将来」のなかで名前をあげている厨川白村は、『苦悶の象徴』のなかでそれを現代人に共通するものとして一般化して考えている。厨川白村(1929b)を参照。

(17) 蘇維熊 (1933c)、29 頁。



も見出されるということである。また、第二詩集『過去と現在の詩』(*Poems of the Past and the Present*)に収録された「月食に際して」(*At a Lunar Eclipse*)において、ハーディが自らの詩の表現に積極的に天文学的な知識を取り入れていることについても、蘇は高く評価している。

こうしたことから、蘇維熊が「自然文学」というカテゴリーにおいて特別にハーディをとりあげた一番の理由は、やはりハーディ文学が「現在」を生きる自分たちにも十分に共感できる思想をもっていると見たからだろうと思える。つまり、すでに述べたことと合わせると、作者の熱烈な郷土愛と「知的風景」を構成する作者の思想の現代性、それらこそが蘇維熊がハーディの「自然文学」のなかに見出した、当時の現代文学におけるある種の理想的な表現だったといえるのではないだろうか。

## II 『フォルモサ』の創刊と「台湾」ナショナリズム

### 1 『フォルモサ』創刊までの経緯とその文学史的意義

では、ここからは蘇維熊が責任者となった台湾芸術研究会とその機関誌『フォルモサ』について簡単に述べておきたい<sup>(18)</sup>。

まず、台湾芸術研究会の前身は「東京台湾文化サークル」である。これは1932年3月に日本プロレタリア文化聯盟（コップ）の指導下に東京で結成された、台湾人留学生を主体とする文化サークル組織で、当初のメンバーとしては王白淵、呉坤煌、林兌、張文環らがいた。当時彼らによって発行された『ニュース』創刊号に掲載された「吾々の文化サークルを大きくしよう」と題された記事には、次のような言葉が並んでいる。

吾々の文化サークルは文芸（文学、美術、映画、音楽、演劇）等に興味を持ち、台湾の文化問題に興味を持ちつゝある東京台湾青年の集りだ。だから文芸に興味を持つ台湾青年は、続々吾がサークルに加入すべきである。（中略）吾々は延いては台湾に於ける正しいプロレタリア的文化組織の結成を促進し、助成するであろう。在東京台湾人学生はどしどし

(18) 『フォルモサ』創刊までの経緯については、そのほとんどを下村作次郎（1999）に拠っていることをここに注記しておく。

このサークルに入れ、そして我々の文化サークルを大きくしよう。<sup>ママ</sup>(19)(下線引用者)

このなかでまず注目されるのは、やはり下線部に記された左翼組織としてのアイデンティティであろう。こうしたアイデンティティをもつ非合法組織であったため、「東京台湾文化サークル」は常に警察当局の監視下にあった。

また、ここでもう一つ注目されるのは、勧誘対象を「在東京台湾人学生」としているところである。「在東京」という部分は、ここに引用していない箇所、「地方」からでもよしとされているから問題ではないが、やはりその対象を「青年」や「学生」に絞っているというのは、一つの特徴として注目に値するであろう。なぜなら、世代が違えば多くの場合思想も異なってくるからであり、ある団体の世代が比較的均一であれば、その団体の思想的性格もつかみやすいのである。このことについては、また後で述べることにする。

さて、その後「東京台湾文化サークル」は結成わずか半年ほどで数名の逮捕者を出し、結局当局によって「壊滅」させられてしまうことになる。そして新たな組織を再建する準備に入るのであるが、その再建に際しては、当初からメンバーの間でかなりの意見の対立があったようである。この対立とはつまり、あくまで左翼団体としての非合法路線を堅持すべしとする魏上春、柯賢湖、呉鴻秋らの一派と、他の台湾人学生も入りやすいように「当面の暫定方針」として合法化路線に切り替えるべしとする呉坤煌、張文環らの一派による意見対立である。

この再建準備の話し合いは1932年11月に集中して4回ほど行われているが、ちなみにそのいずれの参加者名簿のなかにも蘇維熊の名前はない。蘇維熊の名前が初めてこの団体のなかに見られるのは、翌年3月の台湾芸術研究会の結成式においてである。このとき、蘇は同会の「責任者」に任命されている。そして、同5月の『フォルモサ』発行に関する会議においては編輯委員等の選挙が行われ、編輯部長に蘇維熊、編輯部員に張文環、

---

(19) 下村作次郎 (1999)、33頁からの孫引き。

会計に施学習と吳坤煌がそれぞれ選出された。蘇維熊以外の顔ぶれを見れば分かる通り、先の路線対立においては、完全に合法化路線派が押し切ったというかたちである。そんななか、蘇維熊は一躍この団体のトップに就任したのであり、そういう意味では、少なくとも台湾芸術研究会のメンバーの間では、蘇の思想は合法的だと見られていたということになる。

実際、蘇維熊の思想は、これまで見てきただけでもすでに明らかなように、当時の左翼思想とは関わりがなく、どちらかといえばむしろ自由主義的である。また、先にも少し触れたが、この思想の「転向」に関しては、やはり世代の問題が絡んでくるものと思われる。

中心メンバーの生まれ年を比べてみると、蘇維熊、翁鬧は1908年、張文環、吳坤煌、吳天賞、曾石火、吳希聖は1909年、施学習は1906年、楊基振は1911年、巫永福は1913年などとなっており、施学習以外はほぼ1910年前後生まれの同世代で、もともとの中心的存在であった1902年生まれ、王白淵とは明らかな世代格差が存在するのである。ちなみに、『フォルモサ』創刊号に特別寄稿した楊行東<sup>(20)</sup>も1909年の生まれである。この世代の特徴は一口に言って、まず日本語が流暢なこと、そして人文系の学間に秀でており、文学や学問において政治や社会運動からある程度独立して自らの専門性を追求する傾向にあることだといえる。したがって、「東京台湾文化サークル」から台湾芸術研究会への思想的「転向」とは、新たに加わったメンバーを含む台湾文芸界の世代交代をも意味するものだったといえるのではないだろうか。それがつまり文学史的に見た場合の、この『フォルモサ』創刊のもっとも大きな意義だったのである。こうした「世代交代」を通して、ナショナル・アイデンティティの方面においても、それまでの「中華」ナショナリズムや、1920年代後半から支配的になる左翼的文脈における「被圧迫民族」や「弱小民族」という世界的な広がりをもつアイデンティティから、「台湾」大のナショナリズムへと収斂されていったというのが、本稿における全体としての見立てである。

もちろん、この1910年前後生まれの世代の文学者たちは、蘇維熊や張文環の例を見れば分かる通り、民族主義的な思想は常にもっていた。ただ

(20) 楊行東については、長い間その存在が不明だったのだが、その後の調査により、楊杏庭の一つのペンネームであることが判明した。詳しくは柳書琴(2009)、269頁を参照。

それを政治運動や社会運動というかたちではなく、文学という自らの専門分野において発揮しようとしたということである。本稿でここまで述べてきた蘇維熊の「自然文学」についてもそのように解釈されなければならないし、この「合法的」で「民族主義的」という『フォルモサ』が作り出した流れは、その後の台湾文壇にも受け継がれていくことになるのである。

## 2 蘇維熊の台湾想像と植民地青年にとっての「自由」

ここでは、まず「自然文学」を提唱することの意義について、いくつかの観点から考えていき、さらには蘇維熊の「台湾」ナショナリズムと当時の『フォルモサ』を中心にした台湾人青年の「自由」についても合わせて検討してみたい。

第1章第2節でも少し触れたように、「自然」とは「選択を許さない」という一面において、それ自身崇高なものである。したがって、その「自然」のなかに民族のまとまった姿を見出すとき、その結びつきは崇高なナショナリズムとなって人々に共有されやすくなるといえる。

また、「自然」は不変のものである。したがって、この不変性によってさまざまなものを結びつけることができる。たとえば、先に蘇維熊の「*Nature in Thomas Hardy* (トーマス・ハアディに於ける自然)」を見てきたが、このなかで蘇は半世紀以上も時代の異なるハーディとワーズワースを同じ「自然派詩人」という括りで比較している。ここでは、二人がどのように「自然」と向き合い、どのようにそれを表現したかのみが問題とされ、そこに二人の表現の「個性」や思想の「時代性」などが読み込まれるのであって、二人が向き合っていたであろう「自然」自体の概念的差異は問われることがないのである。同じく先に触れた吉江孤雁の『自然文学講話』にしても、古代アテネからローマ、近代欧米、それに日本の『万葉集』から国木田独歩まで、「自然」を描いた文学はすべてこの一冊のなかにとりあげられている。もちろんその時代、その地域によって、「自然」の見せる表情は異なっているのだが、ここでも「自然」の概念自体は問われることがなく、本書は一冊のまとまった文学史として構成されている。

さらにいえば、本稿で再三とりあげている蘇維熊の「自然文学の将来」も、まさにこうした「自然」という不変の概念を用いて、インドや中国、それ

に日本やイギリスなどにおける古今の「自然文学」を自由自在に比較・検討したものである。このような思考は概して、その結論において、ある一人の文学者の「個性」やある特定の民族の「国民性」を明らかにすることが一般的である。たとえば、「日本民族」について、蘇は次のように指摘している。

日本民族の自然観は、勿論東洋流なものであるが、其は固有なものに、ひどく仏教思想と中国文学の影響を受けてゐると考へられる。日本文学に於ける自然描写は、其が明るい側の自然であつても將た陰惨な側の自然であつても、概して偉大なものがないと評されよう。只彼等は微細な自然美を實によく微妙に味ひ、そして珠玉愛すべき文章に表現してゐる。其の鑑賞態度がなべて余りに感傷的である。<sup>(21)</sup>

ここで蘇は、まず日本人の自然観の概略を述べ、そして文学に表れる自然描写の特徴に触れ、「其の鑑賞態度がなべて余りに感傷的」だというふうに、美的生活における日本人特有の「態度」について言及している。

さらに、インド人に至っては「生の理想」についてまで論じている。

印度人の静観的、默想的な思想傾向は、其の発生原因の一を此の森林に負つてゐると思へられる。彼等につては、己の小なる魂をして、宇宙の大魂と相触れ、相抱かしめると、以つて物心一如の妙境に入る事が生の理想であらう。<sup>(22)</sup>

こうした「国民性」の比較・検討ができるのも、すべてこの「自然文学」という枠組みのなかで、「自然」という不変の存在とどのように向き合うかという、各民族の「自然観」に関する考察を土台にしているからである。そして、「自然観」から「国民性」へというのは、ほんの一步思考を飛躍させればすむのである。

文学研究におけるこうした「自然文学」の方法論は、蘇自身にとつてもつ

(21) 蘇維熊 (1933c)、24頁。

(22) 蘇維熊 (1933c)、24頁。

とも重要な台湾文学研究においても存分に発揮されているといえる。ただ、その内容に関しては、台湾人の「自然観」を検証するというよりは、台湾人が先天的にもっている「漢民族」の「文化的遺産」に対する批判にその多くの紙幅が費やされている。ではここからは実際に、『フォルモサ』創刊号に発表された蘇維熊の「台湾歌謡に対する一試論」を見ていこうと思う。まず、蘇はこの論文を執筆した動機を、次のように述べる。

抑々人生から切離された芸術文学は考へられない。何となれば、芸術文学は人生の反映であり、其欲求の表現であるからである。我々台湾人の生活を改善する為に先づ自らの欠点や誤りを知る事が急務である。然る後に始めて改善もあらう。其故に本稿では私は台湾歌謡と世相風俗との関係換言すれば、台湾歌謡に現はれたる台湾人の殊に醜惡にして改良を要する世相風俗及其他を調べて見たひと思ふ。私は遠慮なく己の弱点を暴露するであらう。<sup>(23)</sup> (下線引用者)

下線部を見れば分かるように、ここで蘇は自らのこの論文の執筆動機を述べるとともに、「自然主義」宣言ともとれる発言をしている。本稿第1章第2節でも述べたが、「自然主義」文学というのは「自然文学」の極端なかたちをとったものである。下線部で見れば、「醜惡にして改良を要する」という作者の主観や、「弱点を暴露する」などという作者の主体性が入ってくるので、それだけ叙述の客観性は損なわれることとなる。ただ、それをしてでも蘇維熊は文学による台湾社会の改良を主張しようというのであり、このあたりに蘇の民族主義的文学者（単に学者ではなく）の一面が見てとれる。

本篇では、台湾の民間歌謡<sup>(24)</sup>を一篇一篇とりあげ、蘇が自身の台湾や「漢民族」の風習に関する知識を駆使して解説するというかたちで論が進行していく。その内容については、「拝金主義」や「団結なき個人主義」の指摘や、「科学制度」や「阿片吸食」に対する批判、それに「大家族制度が

---

(23) 蘇維熊 (1933b)、3 頁。

(24) 民間歌謡の収集については蘇維熊自身が行ったのではなく、「皆他人の蒐集に係るもの」だという。蘇維熊 (1933b)、3 頁を参照。

男子の独立性を大ひに阻害してゐる事」の指摘や「漢民族」特有の「天命思想」の解説などさまざまであるが、紙幅の関係もあるので個々の事例についての詳述は避けたいと思う。ただ、本稿においてここまで述べてきた蘇維熊の「自然文学」に関係するものとして、「中国や台湾の大家族制度の発生」について述べた次の部分をとくにあげておきたい。ここで蘇は、まずその原因について「官憲によつて保障されない生命財産を彼等は自分で保護」しようとするためだとし、その「他に又原因がある」と述べて次のようにいう。

即ち漢民族が古来農業を民族的職業として來た事である。農業は従事者をして定着的ならしめ家族中心の小集団を單位として人民を離散させる性質を有する。農民は遊牧民族の如く、空間的に世界を一統する空想が無く、其代りに祖先から子孫に伝る時間的統一を求め、其の財産や土地を確実に後代に伝へようとする。彼等は平和を愛し、極めて保守的な性格の持主である。<sup>(25)</sup>

すなわち、「漢民族」の「国民性」（民族性）を考える出発点を「自然」と関わり合う「農業」に置き、同じく「自然」を相手にする「遊牧民族」との比較によってその特徴を際立たせるという、まさにこれまで述べてきた「自然文学」による分析手法がそのままここでも発揮されている。こうしたことから、蘇維熊にとっての「自然」とは、自らの文学研究における一番の起点に存在するものであるといえるのかもしれない。

そしてまた、本節の最初に戻るのだが、民族主義的「自然文学」者である蘇にとって「祖国」台湾の「自然」は、あくまで自らのナショナルな感情を注ぎ込む対象としての崇高なものであったのである。つまり、台湾文壇の建設に際して「自然文学」を提唱することにより、そうした崇高な祖国・台湾の「風景」を生み出すことが可能になるのである。この「台湾歌謡に対する一試論」の末尾につけられた蘇自身の作と見られる次のような詩にも、その「風景」の一端が垣間見られる。

(25) 蘇維熊（1933b）、5頁。



ポルトガル人の汝れをフォルモサと  
名付けし真ごころを我は知らず  
我等が美はしく造るべき島なり  
現しに麗しの島にはあらず<sup>(26)</sup>

つまり、ポルトガル人がやってきてフォルモサ（美麗島）と名づけた真意を自分は知ることができない。なぜなら、現在は「麗しの島」ではないから。だから、我々が手を取り合って美しい島を作っていこう、という大意である。また、このような蘇維熊の当時の台湾に対するナショナルな感情は、蘇自身が執筆した『フォルモサ』創刊号の「創刊の辞」のなかにも数多く見出すことができる。

では本節の最後に、この『フォルモサ』の創刊と台湾人青年の「自由」について一言しておきたい。蘇維熊は『フォルモサ』「創刊の辞」において、次のように述べている。

台湾青年諸君！ 自らの生活をより自由に豊富にする為に、台湾の文芸運動が我々青年の手に依つて始められなければならぬ。今迄抛るべき所を持たなかつた同志は須らく茲に奮起会同して相助けて努力邁進すべきである。<sup>(27)</sup> (下線引用者)

下線部を見ると、「自らの生活をより自由に豊富にする為に、台湾の文芸運動が」「始められなければならぬ」とある。このような表現は、やはりこの『フォルモサ』という雑誌がほぼ全編にわたって日本語が使用されており、同人のほとんどが「帝都」に住む台湾人留学生であることに起因するものであると思われる。つまり端的にいうと、彼らがそれだけ日本語の言語システムや日本の学術・文化体系の支配を受けているということの表れなのである。そのような支配から一瞬でも解放されるために、自らの文学表現によって「台湾」を想像（＝創造）しなければならない、ということである。

---

(26) 蘇維熊 (1933b)、15頁。

(27) 蘇維熊 (1933a)、1頁。



また、当時の日本の社会状況を考えても、青年の「自由」はどんどん奪われつつあったといえる。この1930年代は、満州事変（1931年）に始まり、五・一五事件（1932年）、二・二六事件（1936年）と軍事クーデターが続けて起こり、1937年の日中戦争開始へと至る軍国主義時代であり、天皇を主権とする「国体思想」もますます支配的になっていった時代である。したがって、この時代の日本においては、「国体の精華」こそが日本人としての共通の意識基盤であり、それを否定する立場において何らかの主張を展開することはほとんど不可能となっていた<sup>(28)</sup>のである。この点については劉捷も、「東都（＝東京；引用者）文壇はファツシヨの重圧下にあつて萎靡し著しく隠遁的にして例の心境小説が流行し出し軍事もの愛国ものが独り幅を利かしてゐる<sup>(29)</sup>」と述べている。

こうした状況にあつて、あくまで「合法的に」という条件付きだが「台湾」を「想像」（＝創造）するというのは、それ自体蘇維熊のいう「自らの生活をより自由に豊富にする」ことだったであろう。つまり、積極的にであれ消極的にであれ、「日本化」を受け入れたことにより、彼らは逆説的に「台湾」を「想像」（＝創造）する「自由」を得たということである。『フォルモサ』全3巻を通読して感じるある種の明るさとは、このような「自由」に起因するものなのではないだろうか。そして、その「自由」を全面的に支えたものこそが、蘇維熊の「自然文学」によって開かれた、「祖国」台湾の崇高で強固な「風景」だったといえるのである。

## おわりに

本稿ではおもに蘇維熊の「自然文学」について、当時の台湾人青年のナショナリズムという観点から検討を試みた。まず、なぜ蘇がトマス・ハーディをここまで高く評価したのかということについては、やはりハーディが生涯自らの故郷・ウェセックスの「自然」を愛して止まなかったからということが最大の理由であろう。そこに蘇は、自らの「祖国」台湾に対するナショナルな感情にも通じる「崇高さ」や「厳粛さ」を感じ取ったので

(28) 工藤豊（2007）、105頁。

(29) 劉捷（1933）、31頁。

ある。また、ハーディが活躍したのが、伝統社会から近代社会へという、19世紀イギリスの時代の転換期だったことも、蘇自身を含む当時の文学青年に広くシンパシーを感じさせる一つの要因であったと思われる。とくに、当時の台湾は日本の植民統治による上からの近代化が進行しつつあり、まさに社会全体が伝統的な価値観からの脱皮を迫られる状況にあった。そんななか、ハーディの「自然文学」は、少なくとも蘇維熊にとっては当時のすべての文学青年が模範とすべき思想や表現形式をそなえたものと映ったのではないだろうか。また、ハーディが没したのは1928年なので、蘇維熊の20歳の時である。そういう意味では、蘇にとってハーディは「同世代」の文学者であったといっても過言ではないのである。

次に、『フォルモサ』発刊の意図については、本稿では「合法的で民族主義的」と「植民地青年の自由」をキーワードにして考えてみた。文学史的に考えてみても、台湾の文学運動はこの『フォルモサ』以降、政治運動や社会運動から離れて自律的に発展し始めるのであり、内に強烈な民族主義思想を秘めながらも、概して合法的に行われたといえる。そうした流れのきっかけを作ったのがこの『フォルモサ』だったというのが、本稿における一つの見立てである。そして、本稿の最後に述べたように、そこには「日本化」を受け入れたことにより逆説的に獲得した「自由」があった。蘇維熊ら台湾芸術研究会のメンバーたちが中心となって切り開いたこの「自由」な文学空間は、その後台湾本土に移植され、台湾人のみならず台湾に地縁的な愛着をもつ在日日本人文学者をも巻き込みながら、この1930年代を通して急速に発展していくことになる。そして、この一連の自由主義的な文学運動の発端となったものこそ、蘇維熊が自らの「自然文学」の方法論によって生み出した、「祖国」台湾の崇高な「風景」だったのである。

最後に、「自然文学」と文芸評論について一言しておきたい。今回の論考を通して文献調査を進めていくうちに、とくに日本の大正末期から昭和初期にかけての比較文学の分野で、「自然文学」をその方法論としているものが意外と多いことが分かった。とくに、「国民性」の研究において、まずその民族の「自然観」から考えるという方法は、ある意味当時の流行であつたらしい。これはおそらくフランスの自然主義を代表する文芸評論

家、H・テーヌ（Hippolyte Taine）の影響によるものと考えられるが、現時点ではまだはっきりと断定することはできない。これについては、今後さらに詳しく研究していきたいと思う。

## 参考文献

- 伊藤桂子(2015)『トマス・ハーディと風景——六大小説を読む』、大阪教育図書。
- ベネディクト・アンダーソン (1997)『増補 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』白石さや・白石隆訳、NTT 出版。
- 吉江孤雁 (1925)『自然文学講話』文芸及思想講習叢書、松陽堂。
- 工藤豊 (2007)「日本のナショナリズムの形成と特質——一九三〇年代の国体思想をめぐる動向を中心に」『1930年代・回帰か終焉か——現代性の根源に遡る』、社会評論社、95-121頁。
- 厨川白村 (1929a)「近代文学十講」『厨川白村全集』第1巻、改造社、3-459頁。
- 厨川白村 (1929b)「苦悶の象徴」『厨川白村全集』第2巻、改造社、135-236頁。
- 下村作次郎 (1999)「台湾芸術研究会の結成——『フォルモサ』の創刊まで」『左連研究』第5輯、31-46頁。
- 蘇維熊 (1933a)「創刊の辞」『フォルモサ』創刊号、1頁。
- 蘇維熊 (1933b)「台湾歌謡に対する一試論」『フォルモサ』創刊号、2-15頁。
- 蘇維熊 (1933c)「自然文学の将来」『フォルモサ』第2号、20-30頁。
- 劉捷 (1933)「一九三三年の台湾文学界」『フォルモサ』第2号、31-34頁。
- 蘇維熊 (1934)「*Nature in Thomas Hardy* (トーマス・ハーディに於ける自然)」
- 蘇明陽・李文卿編 (2010)『蘇維熊文集』台湾文学与文化研究叢書 文献篇3、国立台湾大学出版中心、292-316頁。
- 柳書琴 (2009)『荊棘之道：旅日青年的文学活動与文化抗争』台湾研究叢刊、聯經。
- 蘇世昌・蘇明陽 (2010)「新竹蘆竹浦莊蘇氏家族二百年奮鬥史」蘇明陽・李文卿編『蘇維熊文集』台湾文学与文化研究叢書 文献篇3、国立台湾大学出版中心、269-291頁。

中文概要

## 蘇維熊與自然主義

——日治時期台灣文學的民族主義契機

嶋田 聡

本論文以新竹籍文學家蘇維熊（1908-1968）在日治時代建構出提倡「自然文學」這個文藝思想的歷史考察為主軸。

I. 首先細讀蘇維熊在學東京帝國大學英國文學科時代的畢業論文〈Nature in Thomas Hardy（トーマス・ハアディに於ける自然）〉以及發表於《福爾摩莎》雜誌第二號上的〈自然文學的將來〉，分析作者表現於其中的主張。並探究蘇維熊所謂的「自然文學」所指為何，以及他著眼於此的動機，同時將探討自然文學在文學史上的意義。

II. 本論文中亦敘述「自然文學」的提倡促進了臺灣近代「風景」的發現，同時試圖尋找這與蘇維熊作為理論上靈魂人物的臺灣藝術研究會，其思想與活動主題的關聯性。另外也在關注當時臺灣知識青年的民族主義思考模式之際，試圖對於蘇維熊的文藝思想如何形成，以及對當時文壇的影響作一綜合性的探討。